

被爆者の証言

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年6月11日

「今も続けて下さっているのよね」と何年前か、久しぶりに会った被爆者の方に言われた。ハイと答えたものの心の中では、「あれから作品としては作れていないんです」とあやまった。

過去にいくつか、原爆のテレビドキュメンタリーを作ってきた。最後が終戦50年の1995年で、『はだしのゲン ヒロシマからアメリカへ』だ。作者の中沢啓治さんと核実験で被ばくした米退役軍人とともに、各地で賛成派・反対派と討論をしながら、アメリカを旅した。

スミソニアン航空宇宙博物館の原爆展は、激しい反対圧力で中止に追い込まれていた。結局、原爆資料はなしに、投下に使われた戦闘機エノラ・ゲイのみの展示となった。この展示にあわせ、日系3世のステューブ・オカザキ監督が準備していた映画も、製作中止となった。

そのオカザキ氏が25年がかりで完成させた「ヒロシマナガサキ WHITE LIGHT / BLACK RAIN」が、この夏公開される。

観て個人的にうなったのは、同じ25年前、私が10フィート運動のテレビ版『幻の全原爆フィルム日本人の手へ』を作った時、ラストに使った水爆実験と映画冒頭の最初の核実験映像が、そっくりなことであった。核廃絶がまったく進んでいない象徴と、私は受け取った。

実はこの正月、友人からもらった年賀状の一つに「北朝鮮が核実験をして以来、日本の即時核武装を公然と主張するようになった」とあった。もしかしたら、こんな考えが増えているのかもしれないと思う。

映画で証言をしている被爆者の数は14人。でもその背後には、世界中に膨大な数の被爆者がいる。未来へ向けて、伝え続ける意志を持ち続けなくては。